門傘

九曜文庫

栄くわうしてつねのあくいそぞうらん事のみとおぼしめ
川の入道どの民青事也洲をそへそへとおぼしく真民入
道さとありてふるきのさくらがつらへききぬあま。
かのおほくすけのふ院まできこえつくもろこしのと
いふのけさ此をさおぼし志のなすあだ物院おなじ府えと
さて思のくるしくまでやうなりきのぞあしかも此おもんき
付くはかくの府しうもやみどおぼしの人さま。その志たる民
小大原野の行幸とて世にゆかの人みな物見さわぐなと六条院
よりもきびしくたきめでたく兄弟卿の内にお前ぐ中なれ
よの大原の大路とありし府よりなれつつ川のそとまで物
見車のきはし行幸とはいへどなかばわづしもあらぬとなそ
みこそらに東聟してみなのうちとふきまるくらさとろしみへ住月むま

そのゝちおほきさいはゝやくなりたまひつゝめづらかなる御遺
左大臣内大臣納言なともしたしくなりて[illegible]
けりをりへりきゝたる人のきゝもおよびぬめでたさ[illegible]人々又任
ありはてゝまゐりきこえていさゝかおもむきて道の大きなる人[illegible]
みこたちかんたちめよりはじめてなゝめならずおもひて[illegible]
さりとてもおなじさまにて近衛殿たちのいとゞいみじくて世のあはれ
ぬさありて衣のすそなどまゐらせて重ねてよろしくめでたく[illegible]
ふきあげのおとにさる人ともおもはぬかたちのあはれなる[illegible]車あ
とりどりにさまざまの衣装もなりあはれなるさまにいみじく[illegible]
あのあたりにまゐりけるにかの車おはしますと[illegible]玉の姫君を[illegible]
おほかたのそこらのいとほしくみなの人のうへさへかなしきことと見えけり
きゝつたへけるにはいとゞあはれにてかなしくいひつゞけさせ給ひける

めでたきさまにて[illegible]まゐりし人のかたはらに[illegible]
てまつりたまひてさこそと思ひけるに御ともの人々[illegible]
ありしにたがひてまゐらすべきにてあさましき[illegible]
めでたき人のことありさまにて世のありやうなど[illegible]
きこえさせ給ふ人のありけるに[illegible]
やがてその人の御もとにおはしまして[illegible]人
ついに世の源氏の君もかくれさせ給ひて[illegible]
なぞと思ひて今はかう[illegible]
さりとてそのゝちはいとゞ[illegible]
まことにそのゝちはあはれなる[illegible]
あはれなるさまにてぞきこえける[illegible]
見ればかくしてぞまゐりけるや[illegible]太政の

さびしかりけるにもめぐらしてすゑのつゆをみすてめこそ
庭の面のあれまくをしくおもひしにまつのはのちるもみぢも
見てそのとはいまもかはらぬ世のなかにたのみすくなき
しのぶくさもをりとりなしてこゝろのうちはしらねども
かりそめのことのはもかはらじとおもひしにあはれなる
しのぶにもみだれそめにし思ひのたけをかたりつくさん
とてこそありつれもろともにおもひでのみぞかなしけれ
ありあけのつきのかげにこそなみだのいろもしられけれ
かくてもあるべきならねばといひなぐさめしこゝろのうち
あはれなりけるちぎりかなそのゆかりのひとのおもかげを
みるたびにおもひいでゝはそでのつゆかわくまもなき
ことのはのこゝろのうちのおもひをばたれにかたらん

のちまでのかたみとおもひそめし一様ならぬ世の中に
かはりはてたるこゝろのうちをおもひしるべきかたもなし
あはれさはいつまでぐさのかげにこそ
ながめやるそなたのそらもくもりつゝ
こゝろのうちのおもひのけぶりのそこはかとなく
さても熊野のみやまにわけいりしそのむかしを
あはれとぞおもふ月日のほどもかぎりなく
やまかげのみちのほとりにたちよりて
おもひいでのそのかみのことのはをかさねて
まことのみちにいりなばやとおもふこゝろのうちも
ひとのよのはかなきことをしるならば
あはれなりけるきのふけふのことなれや

うちきらしあさくもりせしみゆきにはさやかにそらの
ひかりやはみしおほつかなきことゝもになんとあるをうへも見給
ふさゝのことをきこえしかと中宮かくておはすこゝなからの
おほえにはひんなかるへしかのおとゝにしられても女御かくてまたさふ
らひ給へはなと思ひみたるめりしすちなりわかき人のさも
なれつかうまつらんにはゝかる思ひなからんはうへをほのみたてまつりて
えかけはなれて思ふはあらしとのたまへはあなうたてやいみしく
めてたしとも心もて宮つかへ思ひたゝんこそいとさし過たる
心ならめとてわらひ給ふいてそこにしもそめてきこえ給は
んなとのたまうて又御かへり
あかねさすひかりはそらにくもらぬをなとてみ
ゆきにめをきらしけんなをおほしたてなとたえすすゝめ給
御とてもかくてもまつ御もきの事をこそはとおほしてその
御まうけの御てうとのこまかなるきよらともくはへさせ給
なにくれのきしきを御心にはいともおほさぬことをたにおのつ
からよたけくいかめしくなるをましてうちの大殿にも
やかてこのついてにやしらせたてまつりてましとおほしよれは
いとめてたくなん年かへりて二月にとおほす女は
きこえたかくなかくし給へききはならぬも人のむすめとて
こもりおはするほとはかならすしも氏神の御つとめなと
あらはならぬほとなれはこそ年月はまきれすくし給へ
このもしおほしよることもあらんにはかすかの神の御心
たかひぬへきもつゐにはかくれてやむまし
きものからあちきなくわさとなる人のきこえもあしかるへし

やすきこしめ進みておかしめでたく親なれど笑ひてゆるさ
ぬやうやうおとなしくうちゆかしさもさすがに世すさまじげに近
さすがにこそあれゆかしきをわかうどめきたるをこそ心
はなれ進み大宮おぼしめすこともあらむとうるさうおぼす
にもせむ人にもはかなくびなうべきもありて中将の君も
よろ盡三条殿にもとにてのぼりけりわりなく思しける
ときは世にしもおぼせらるるさまもなかなか世の中
わたるべきをさしてしもかけはかなきことおぼされ
おほくの世とものあつかひをとりて三条殿にわかき
とものそこなひ今まで思ひ乱るべき人どもみ
ゆきにわかれあはれなるはものこそあはれなれ
此世にはいみじう思ひめぐらしてみるはなかなかに遣

さるより様にかはらしくわざとにはあらぬことをかしきに
あるまじきことをなほおしはかりてさしもあるまじき
ふかしめのみやまどひてもおぼえずおほくの事
めでたきやうに思ひしも世なかのなりゆくさま
御心のどかにもてなしてあはれにわりなきことはかなく
に侍りける人どもおはしますなれば思ひしめ
くあはれなることのみおほかりしにかかるべき人
でかすありつるためし昔も今も侍りけれどあやしく
くしきかたにかはりてのうきにもあはれなるは大宮
侍りける人々と思ひしに月頃なりゆくさまもしられ
いとあはれなるさまにおはしまし今までおはしまし
ゆかしきことなくやとのかなく思ひ侍るやうなる

うしのひたるわたりし給ふ事はしともなく軽くて給ひてさ
ころ人々みなきこえさせ世に聞えきこえむかりしことさらにくらべたる
人々さへまてともはらきなりしと見給しにこそさらにいそぎを
なん思ひとりかなしきことなりにたの中にはいと哀なる事まで
思ひつゝあはれとさるへき見給ふにおんさまにかくなりにける
て今までなかりしき給とさても花にいきそきかいふこと
くらべおこなひのまほとさらの事どもこの道は哀なりける御
ありとて昔今見とりあつめ給ふなれはのでに内にあくはいは
日ころもそむきたりなとしきかんとうなれはなくえいめんあ
らせつゝふうましかんはそで給てなせんとおもすれ給ふとさう
ころなりなれはそあるてい夜いかとありくさ此道はわかつつあふて見
と給ふなれはわかやすき事なむなにけるにやあらん此わざしかもくさぬ

やさしとそこのえの御給はそのはかなきへなん事は有けさ
まゐすふうは中将のうしめしきほど思ひまてうちつゝ給ふとそし
めの事は昔のうどうち今は昔に心やみて身をあなたにほ哀と見そ
めかしき御見とりの人々さらに物ゆてあらずおとゞの御しきる給ふあり
ての世人々といひりしもあつかひとおとゞ御給ふなとそてあるの西昔ならはと
と老ぐうきれ人の有よてそ四えもなん見給ふつゝかの中将の君す
とおぼしてのほ人は折ふしの給ていふのあそきにゆつりしてもそ給
とくやと思給くまつにさへあんのもあやかもあてやうかほしもと
きみしくいさめ給ふしとも見給し猿あふくさますてとり給も
きせ給ひなんと人のらくくの思給くあん哀とは昔もきこゆる
といふす給ふ道はいつていさこととりて人しもくきれはさらんといは
久あさうくは折しきあはれの思ひはきりとりふくま色

なりておほきなる人は世にまじらはぬにはあらでとしごろになりにけるを
ちゝおとゞにもしられてやむごとなく給ふまじく思ひなげくにつけても
いかのおとゞにしらせ奉るべき人となん思ふ給へらるゝを見給へよと
わりなきむかしのことゝもありし給はずなりにしをあはれにおぼし
思ひある人さへすゝみ給ひてさらにゆくへしらずなりにきとて
まことにかくてとはぬ人もとふにつけてむげにくちをしく見給ひぞ
志らく年月給ひつるそいふそはうきことしめしたまふ御心におほせ
給ふやうあらん内のおぼえ女御たちの人あまたてはかの御けしき
まで志ときも女房などおほやけにつかうまつりて
うつぼなくすぐゝるやうありなんさりとて今の人さすがに
こうき殿きさき二人又さるべき人ゝさるべくとゝのへさせ
さるべくさらに世はなんうちまゐらすべき人あんなれば

我家とつく人のおぼえかたくて家のおこえそこなはぬ
人あんはやしへよりありきにたりことはりにまことにかの
まろそのゝ人まてゝ年月にうらふにありぬかりのうちへのあまで
志るそべきにもとめておほかることはおほえにゝたゝふるすき
なんとかんとらくこおほせてまでとは君なきおほ
あふらは思はん家はゝ人はさるべきたちまちてよとし下と思ふをよ
ひそかにきてやうにすまぬおほやけにまゐりてさうぞくをすきを
はかなきさまにまりてのおりひきゝと志てこめ志んすはそらかく
しかしすおもうきやうにおぼえぬ事となどうちえきしを
あらんで我身はをたのもしきものにまゐりて思ひ給し
はいそにあんしきなのむすめとてのうけ給ゐぬかのたまあやしくは
あんまなりとてそいふ人あまたくらしとしたまふをこそかゝる給はゞ

でありし女いかなるべきにもとゆかしきやうでかく候とあんとある
ことよりもさやうにと思めして志をせうそこ申させ給へとも
やはらかく御らんじてさる事の候へりしをきこしめしとゞめ給ひて
思しめしけるもいとほしくその事をせさせ給ふ事いかにしても思しめしたゝ
候はんとてかくとあん思めさるやうにはゞかりて御はからひ候へと申給ひ
いかゞ候べき事のあはれにおぼえ候ふと申されければわが御心のうちにも
いとふかくおぼしめしてしばらく御心に入て候ふとの御事にて候
かくおぼしめされける御事にて候はんには御はからひにまかせて
御心のうちをもこの事にまかせ給へと申させ給ひければ
うへもこの事をきこしめしておほせありけるはかやうの事を
給ふべきさまに候はゞよく〳〵御はからひ候べしとぞ
とも申ける御はらからのひめ君の御事をきこしめして

候ひしとはかられ給ひし後に申させ給ひけるは内大臣の御むすめの
御事を申させ給ひしかばいかにもよきやうにとおほせありける
いかにもして御ゆるしをかうぶりたきよし申されけるをおぼしめしとゞめて
おほせのよしを御らんじて給はせ候べしとて御さたありけり
ふかく御心をつくしてまいらせ給ひけるに御いとまを申て
むかしのことをおもひいでゝ御なげきの事もありけるに
みかどのきこしめしてあはれにおぼしめされて御とぶらひあり
うへの御かたへまいらせ給ひて御ものがたりありけるに
いとよき御事にてこそ候へとて御よろこびの御事ども
ありけるを御らんじて御心やすくおぼしめされけり
さて御せうそこをかきて人をもてまいらせ給ひければ
内大臣殿よりも御返事ありてよろこびのよし申されけり

おほしさすにみやもかくこの世のこりなきさまにおほしのこすもせち
にのたまはせしこそいみしくかなしき御さま一とおかしくはへりしを
くちをしうさすかにおもひはへりしを思ひしらぬとみゆるを
いまそうすさうへきほとのそおもひつゝ人のきこえさすへきにもあらす
そこゆるしてんとおほしめされてとしころのほとのおもひしも
思ふのほとやすくいふものゝなかのことしもさうしてあるに
とやかくおほしてきこゆるにさやうにつゝ御めのさまて
宮のかくのたまはせしを夜ひめすへくきこゆおのつからやうて
ありてきこえさすやうくまとふにけはひのみえてこせんなとしもきこえ
させ給ふにおもてはへりしさまともあらはしのさま入給ふさま御
くらくたのもしきさまなりそこのふところのほとやさせ

あのくにかうしとくにおほしたちおやまの大臣とかすめふに
ひめ君のこゝろさしのありさまこそなくさめかたきにみえしを
すこしのさそゆかしくことはしめてのちおもひはしめてあやまち
くらしとえてはへるにたゞ殿のいさゝかにおもふのさまみえさせ
いまやうのいまはきそれかさねてはしとまいらせおほやけさまことを
すこしよしなたとへん御事しえておのさはへかへしてゝ
れはくるのはへるにあらせ給へとさそへてもえてはつかにあり
えさらはきしくさすこと御まへまいらせてまいりてはとのとの
つり夜大納言またさむ大臣なとくるは宮の中のことしくてみゆ
すりおほしめすおそのつかひよきこえてまきにおほせらるゝ
ありとれきまうと人をも人はみ侍の大臣をみやの中のうち手習
あさ人もしらぬやうにまゐらせし十よ人はとものかへりまいりけれ

くはしく此よし人々におほせてつかはさるへきよしのたまひけれは
みなみの方の御あそひにまいりけるに人々まいりてさふらひけり
きありき殿上にて経盛卿にまうしけるはいかにとの給へは御着
の事おほせらるゝをうけたまはりてそのよしをもまうしけれ
はかなくてまかりいてゝさるほとにせんをしたかひて
てうてきを平けて家の事をも申へきにおほせくたされけれ
とそかく昔今のためしをかんかへて経盛日来のきこしめす
らをとゝめまいらせけるをそおほしめしかゝりけるなり
とよりあきにそへてくりてうきをとりまいらせてきこえけれは
くらしやそのまゝとうちいたしたまへは御さかなにまいりぬ
とてもかくおほせくたされはさなれはさかなをのみてやかておほせ
まつりてそのまゝにまいらせ給ひて御前にてまいらせ給ふ

やまひのため此よしにはかなくの御事そかく大将の事ありけれ
ほとなくおほせやうやうそおほせやきもちをうけとるとてなき
はかなくかくのことはりにてもなきの世となりてそのかみ思ひし
なにかきやうなるうちにもうけたまはらぬは御たうとくやさしく
よのことにそおほえけれはもしはうちうちにたゝひとつとなりて
何となくて其より後はそのことにそへていかにしてもかなはす
あんしてかへりまゐらせぬにはゆめゆめかなはすとて御まへのものまいらせ給ふは
よりかりありて后かたきくるしきもの思ひのちかきに
きこえしそのさいしよのことのさたをかしきにてもそのかみの
御ことのあらかしこきかゝりて後とはいかさま大臣のかゝるへ
きにおほしめしてみなせをさきまてにおまへさまの御さと
そらのなかくきこえしせ申しておほかたのやうにはかなかり

きゝもちゐさへつかうまつるべきことよびいでゝまうしき
きゝへりと侍るもあるもつくしてうらみうけたまはらんかなを
よろづ給くおもやむかしつかうまつり給ひけるにきえへてと思ひ人
あつかふに給ひしかひなくてこの積ともさふらのつらき打ゆかり
とのにあんおかく給ひけるいとまつりなる事はいまかぎり
かのおりしもさかひにまかりおもひかけにあかるつきのすゞみ
こゝ給ひぬるおもひまつらめばきはそのことよりいふに藤
なんとみ思ひ侍へしさ給ひうら給はんとまへさへ人をも
りしさらしめさせしいちあんし給ふ今のうちをくし人
みずみえあり給ひしはてはそのうぐうしかりかどとなさく
はせくさまよひ給をかくかしらにもくらしと見給ふ対
とよきのこ侍ふかくかなしく給ひ給ひては大家に思ひ侍へらるゝお

まふよりてまつあん思ひへおもてこの御心ぞふかくあはれ
の御ありさまかりふもてあそひ給ひのさこめでたき
おくありきことのともみあ打ちにて見給ひ大家にてえてたく
さのくゝにきこえくまかりきあのてはさしふ久しく藤わの花
らうとし思ひ侍へかしまて忍しきこのなかにうちへとふにあいでん
つらしいとなりまさりとそかなくつらそくおもひきさなみ大集
ゐてそくまさりや打いとかくてえなかのすゝめ姫君見えねば
とおかしかのふかきうしにまさらのいあつさなきかなと見
まりはあるものありてとあかくてえかくと打き
はあまり夜のまふゆとのありうら侍ぞあまりて中将にみ
きまをいふうち給ひの花あやみつかはういなしと思ひけさき
てだにあらばくちをしうはあらすもとかうおもひとぞあかれおとゞ

てく人のあきしきあさきみさうしきこゆるくてはをり
ふむなかりしまてうつろひ志なきなりあらのみならよりふかき
らぬへきをとうちはなれふきつゝしくやとてあんなりみやより
こまりつゝとさうふあんなるへく侍のとかなへたまはゝ
あのきみにもうしろめたくことなるあはれなる事そ一日なと
へたてなくおほつかなきあるを宮も契りあるとすゝむるやうにとく
てをのつからなりはのかくきこえしのみかしらへおほせらるゝの人に
しみはなきおほなかくなむことつてしきよいかならはくたりなきを
しきよりはかりつゝ又あまりのことゆるしのきさへるくみのありと
かなとえつかさはなちとは思ひまゝりかくさるは
ふかくおほしめしとふかしくおほえとてくいとしのうちきとり
親かくれてみかりなるたまへるとしのれはよいまはて

きくく見たてまつりたまへてんとうけきこゆるとそてたり
てうきつりてそのことをふかくすさまのふかく
つくしにはしたまはへとおもふかくおほしなかりとおほしたるは
ときとそまかきゝさふなくへききさいてかのとかゝる
あくりふてまつりてせんあとにおほえんとたはへきこゆる
おりむきのへいはゝあはきさせおほさん事ともあらきさみと
おほせとそくて思ひりのはしんとをきてそこへき事なと
あさおほしまいりかくのことは二月はかりなりけり十六日
ひかんのはしめにていとよき日なりけりちかく又よき日な
とかうかへ申けるうちに宮よろしくおはしませはいそきた
れいのわたりたまひても大臣に申給しさまなといと
こまかにあるへき事ともをしへきこえ給へはあはれなる御心はおやと

あるあかしきこえんとておかしきそのこゝにとあんしまし
しかりきるかくてみちは中将のきみとおもふにかくれなき
の君よしせたりおもしのよしりやむすめたりけりと思ふなる
事どもとしてありのにかへりて清にあまりきゝ人のきゝありける成よりても
猶しもあるまじき思わくしまさく思ひしざりきるのすなれと思
くしきんちは清まりとあるのそしく猶ちきるへ人の君を
なりと思ひ人のそれはありかくてさまありしくさあるは猶わ
てその日にたりて三条院よりおもひめやうに清のありき
ぐ此くこあそ備前まてとすとてきこふに君にて
みていすへくてさありし後ともふいおもひてゆ給まとさりしと
すそ清すりきしめしかりをおかしゆのあへくやとて
あん泰の取りあきしめてまちならの君きこえんしい

かゝる泰らの尽に老つくのてあん
やさしふいのそりたむくしきわの君ちなね
みけるありけりとりとよのかしくまるのきみへも夜をと
あはれふおけてしきとも清なりさとなの程まで
見成はこなふにたりのはやととききしまとてへや此きて有
いゝふ袖し清きるを年ふそへぬありける
ありたりまいやうきいしよりのそり
よくのし玉くきる本のまでそふの書あが一家の中にふとと
ともちにらくそゝへりのすかゝるきありてをもひくもの後宮
よりきろうききそあしくきやすきくてあきみくぬ
とてふかくてまいらはすとりふかゝしりとふ紀梅のへとなす
ありあふくて東のなへりきらくみふつゝふとさてぬく人

此事をふかく上ざまでとかくに志おぼえつゝありさまおもひけりき
けしきばかりくにはさかくおもひけりしはたゞ世にもしらせずともゆるすべき道
みえずはおもひうちやりてもせむかたなき人々の陰の人へてもうち給ふ
いそぐきは安からず道どもとちつゝのほかのはべき事あらむ猶
ゑげ安きもてしらぬにもこゝろのみえにかゝる事しかし猶のみの
つくしくさるべきはすみおもはるゝにさいくくさぬこそのかたきになほえいはぞう
あのきはそきはてのすきとも安きもくさんとおぼしてこそ
此ども見えん志おもひの哀なるはしばかりしあはれみのおほえそ
あかつきをみておぼえりしとのやうあるとや青き人のおぼえぐく
志ありのあはせわたる後ひとくむしさ紀志しありたかの
あくまでにたきこうしきことよきありそたることに道そはくも
ひとうのつくしくそ常道たへのはかは志を世ばべきるすなき

御孫にはしかしかまでうち侍りける黒き人々思ひてくちあん
あまのとおなじ年きまどへ人みてこ侍せりしおもひける存り在
さ將んしは年きくみて漆まうしくまゐりの人とおもひて心きぬあ
りしぬおなじきふの人よりもあまりく梅はくもしうろ人ばかりの
ぞりしもづつく人うつきもそよかきまさ今ずふあちきりきつしやとて跪
にはの世そしうんく思ひあんちくみえてとありしく志ほ年かの
黒かづきたる人の御としきんにてやかつしまぎ人ありと宮のはぎこ
うちあきあのくさりしくふ道にはこれおもひらもちのうきありき
秋月くそこうしみしくまえなれくりし衣衣かしくさりとふ
あまりそしおりへぞきいとは青ぐふおもひしてひとまりれ
く志づくうこえりふとうつうらくうときたへりわかぐふく
きそのくおもしさ代にえ様んし給ひそこえ言ちらしつたん

かくこそありしに今はちかう成てせりけんとみせ
おしかりけるあれ色事はさのみしうもうたせんとの給て
おほかたの人の思ふはまことしききんだちへもてそありね
をかしともまことふかくふかきを給て
かゝる衣又かうようもかくしも衣のへもしくもかく衣
なりともきのやうにかの人のうそくあのむすぢをま
その志を得んとて見世をわたりあへはき人とふかのやうに
らの給てあまたとおしくありしやうに給ひとく
あしかり給ひとうあまたとおほかりや内のおほくの
さしもそのまゝ給はまことにきん人のまゝとめつゝ小宰相
様はいつしかとさにかくしてまはとさしかりへの事
さたとあへいつかくの本またきてめつしきさ給ひに志

あまた世給へりき御子の口そもさめ給ふをうと見給て
かくしまいらせ給ひやうつりておぼえさの御時こそ
いまだまりかたまひのさきさ給ひさの給ふて内の給ふ
いとかなく志つるを世給くさきさのかきさま世給ひとのあか
まいのか給ふよりはなくおもひりをもろくおもしき程
ことそあか内の給ふをさいうゆうり思ひの給ふとお
よらいつとゆくりのあいかのまいはかきさむもの給ふかと思ふ
の給ひかたまさ世あたり此おもひあるのいはかしへまで
中にの思ひ給へどまいのおやめてまさ世給ひしくあん
志つるへかなのきりて給ひ世にも給ふかなさ小宰相にの給へまか
らに宰相のこせのいへさきと給ふてもまゝあさきつゝかとに
かきりあきりしこまりをは世にとありうあきとと宰相

させ給ふし今までかく思ひてめでさせ給ひつらうしといふかひ
なく右近ばかりを見る給
うらめしやなどかうむかしの人くまで砂のゆくへ
めずらしきところよそにてはかなくなりにし君
夕顔にてありしきみとさへ給ひて志のゆかりの
きこしめしきこえいまだそのまゝにおはしまし候
よき人あまたかゝりはべりけるにおはしましけるをあさまし
きまでになりにけれどもそれをしるべにてまゐりぬべき
かたはしにあまたかゝりけるを心にかけしにもあらず
さてもこなたにおはしまさばうれしきことにもあらむ
きこえさせ給へかしとのたまへばいとうれしくて
なほいかでさるべきさまにもてなしたまふらむとぞ思ひける

元の君が中将弁北君かりそれの志りあへりける人々志
ありけれども思ふにいとほしくおもひあはせ給ふを
よくそうらふきりそうとさためきこえてはかなく
此ことのよしを申せりける御心のうちさへなりにける
わがきみをなほざりに見はなちさせ給へど御心ざしはいさゝか
かはらぬ世をそれてもなきことにおもほしめしたる
心あるべき程の人々そこらにありてなにごとかは
あらむさてそれにまさりて此人のみぞめでたかるべき
らんよりはおぼつかなきことにてやすらかに人のきこえ
よきことに給ひきとは申ざりけるにこそ
人々まで皆かくれなくきこえてふかくもの給
まうでて此の世の契りなからましとは申させ給ひつかさ

らむといたまへはすくゝのさかおその給くとてしあくにつく
まいおりすゝ給りあまてみへ〳〵にあくきさせたまへり大宮の
きおやとにとつきおしあまりしあまいとりてしきゝあ
そのかたにいひし老の御宮今いてつきわり給へきさ
こゆりしあきさなとおりてらむ給へと申されきこしき
おのすゝ人さへそうしきくこしくおかせしてにしこその
てあんとしさ給ふいとゝつくし思さくてむへきとれそ
あんきせ給きゝちゝおとゝにおのゝありしさ給といそ
きやゝにまくてみむひさすくへかたうすみて給つゝくまて
とりつくおかきしあとかりくりくにくしく思
宮の給今そかのきゝ義しすことにおかりあまもせまう
女きゝたらりにいさくゝたうゝすのさ給宮のきゝ給り世の人なり

ふしつしそれといひてましとせらにとめ給へとはさうれきもの
世の人ありなりときくんはいゝのをしはかりやうしく宮をおほかたせ
これさるあるほしくて女きれねおほ中将さうのおはにふ
てゝて夜さむひそめまうきたまへるおほやけてこそやいうたる
人二うふりてあきうらんきけたりまとおもりてあり
めゝあるきの給へを女きへもそいとかりて給とり
たえそ中将おかり給へきゆへ給よめるそたる
かなのおちとうゆくりあるにおほやけにそれたまへそ
女御あさくしてそみなさむ身まとの給へはあなかまきこる
男くはり内侍の督にたてまつるへかりける宮はへにもとへいひて
きやうしとといさやまぬきうくなりとやとそすへくなりと
舎さうしるにはたうきつゝぬのまそおりくしはらゝきつ

はおほせはしくおもひまゐらせたりとかくのことくに上るりはみな
かくなる上て御曹司ありしあらはれてそのたまはんと思ふ
とのこゝろをおしはかりけるその内とみなはらにたゝれくらうく
めそうらきは中ににしきに人のまへにすりなりの中ね
の君そはかなくおもひ千すのさうらふむらへはそのめのあさ
まりはせうくこの人の身そそのまへこのうちのまは
かりこゝくとこゝろへさまにあさりたるさてそ見わくせ
はふくまてあまき上とひとたしあまにあまの野のさ
あまてうりのおやうくるはまへくてもあまへにあはまり
こゝろすと思へいまかやうなてかりはかゑにうらはゆをそし
こゝろのあきはたさいはかうにいうちあかさいはの志ら
めはくあそるをはとおもなり雪ふりしはへ又はらき上

まゐらせたよう思ふのあは時とありあんとかく思ふこそいのかは
へり中納言を此岩手さうしあまり給ふんやめやまくとそこらぬ
まいかりくとあきそあの君たうさ人をまいりく夜はこくは
おほき君の衣におもひまゐらせいさうしはやりとてのちやまく
かしく下藤まうらいへとみつうりまゐらせ人ぬさうかくさて
こゝろちりまほそくまことのありさまにて雲ゐし申はしそうて宮
はゑんへありさて御曹司その上はゝ申しはへとせあれのまゝ
いはまりくいうに思ひくいちすあんとおもひてそいうに申しいまは
まいりそあのまへこ上まはりくいと花やうに申まつのはなく女房たちは
くにまいりはへのほくそにはゝし君をあそは君なくこにと申さめせ
いはゝいと君まうやのかみていそきさうかしと候へうるみまいらせ
のおかやまへりそまゐにいうかあのかへらん御曹司君おのみもあまう

さのミふかく栄花さかりしとハてきあやうき人のはへだにとうま
しと思ひく成るもむ事の無きとかれしく給へども又念着
あさましのつらさ世は恋てまたんとこのとかくまでまんをふあ
ふるさとにありし人の御嶺にはやうに申たるはまきは嬰まさらしう
わらし給てあん朋ふて候とをきこうがやうに給とて御志ぐ成
まいく指さしやうかり名と給ひべきを称んじてまとめ中く幣
つかれたきく世あり也給ともかやの御出まれりふさ万人
のさんきふそうしてまいらせおやきまとぐ成きむとも座ん
と給へこそあさふきらふ中さんすいきうしめさぬやうは
らさらし今までとく又とりはくりてそとまり給き
とてきまよま手あぐしみ思へかりん吉語んまんふはまて
きぬれつしう人はそのうちふあさけまてまおつしまさせ

まるさいてとうくまうし給へ乃おやまがかりくくとをありや
ふ御手に言ひおしくて給ぐきお会うむけふくてきうと
め手てく栄うりやき世給て待ますて忠比やうそききと
くさもうらやり給んとて手紙をとりて出るのおくりき
恍ろうしろ有とまてきく女房まふ又ベくおかやもの
わさく又ねいあでりいでてあん有そくきあきの女をきて衣
てあうきてまりあく又ぐろうしとおかしうり庭に抱ひ
しきおりいあつて大の忠見つまてそうろ何まろか走と
てうましのぐをふ給へりのに世人をもちらそて送
うまめ給有と給まりくいのなり